

那珂市議会教育厚生常任委員会記録

開催日時 令和3年5月17日（月）午後1時30分
開催場所 那珂市議会全員協議会室
出席委員 委員長 富山 豪 副委員長 原田 陽子
委員 關 守 委員 寺門 厚
委員 古川 洋一 委員 武藤 博光
欠席委員 なし

職務のため出席した者の職氏名

議長 福田 耕四郎 事務局長 渡邊 莊一
事務局次長 横山 明子 書記 田村 栄里

会議事件説明のため出席した者の職氏名

教育部長 小橋 聡子 学校教育課長 会沢 実
学校教育課長補佐 平野 玉緒 学校教育課指導室長 白井 英成

会議に付した事件

（1）調査事項について

…教育委員会より小中一貫教育について報告。学校教育全般について意見交換。今後の調査について協議。

議事の経過（出席者の発言内容は以下のとおり）

開会（午後1時30分）

委員長 改めまして、こんにちは。

本日は、教育厚生常任委員会にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

冒頭ですが、本日の会議が急遽になってしまった点、段取り等々が悪かった点、私のミスでございます。先に謝らせていただきます。申し訳ありませんでした。

本日の会議は、学校教育全般といたしまして、大きなテーマで細分化したテーマは設けてございません。どうぞ忌憚のないご意見をお寄せいただきまして、有意義な委員会にしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、開会いたします。ご連絡いたします。会議は公開しており、傍聴可能とします。また、会議の映像を庁舎内のテレビに放送いたします。会議内での発言は必ずマイクを使用し、質疑、答弁の際は簡潔かつ明瞭をお願いいたします。携帯電話をお持ちの方は電源を切りいただくか、マナーモードによるようお願い申し上げます。

ただいまの出席委員は6名であります。欠席委員はおりません。定足数に達しておりますので、これより、教育厚生常任委員会を開会いたします。

本日は、教育委員会関係職員に出席をいただいております。職務のため、議長、及び議会事務局職員が出席しております。ここで議長よりご挨拶いただきたいと思います。

議長 ご多用の中、教育厚生常任委員会、大変ご苦勞さまでございます。

今委員長からお話がありましたけど調査事項が、学校教育の現状と本市の現状ですか。遅れはないと思うんですが、その辺をひとつ皆さんに報告をお願いしたいなど、こういうふうに思います。

ひとつ慎重なるご審議、賜りたいと思いますので、さらには来月の定例会で、委員長報告がされますよう、よろしく願いをいたします。ご苦勞さまです。

委員長 ありがとうございます。

これより議事に入ります。

1 調査事項についてを議題といたします。

昨年から新型コロナウイルス感染症の流行により、教育現場では様々な影響が出ており、感染症対策や授業時間の確保、GIGAスクール事業への対応など、大変ご苦勞されているところだと思います。当委員会ではそのような状況下で、学校運営について、現状と課題を調査していきたいと考えていたところですが、本日は教育委員会にも出席をいただき、フリーディスカッションという形で意見交換を行い、委員会を進めてまいりたいと思います。

まず、意見交換に入る前に、学校教育課より小中一貫教育のこれまでと今後の取組について、ご報告があります。

それではよろしく願いいたします。

学校教育課長 学校教育課長の会沢と申します。本日はどうぞよろしくお願い致します。

小中一貫の説明に入ります前に、本日参考資料としまして、那珂市学校教育基本方針2021及び、那珂市次世代の教育情報化推進事業「那珂市エドテックプラン」のつづりをお配りしておりますが、こちらのエドテックプランの中で1ヶ所訂正がございます。

申し訳ございません、右下にページが、ちょっとないページもあるんですけども、右下13ページがございます。その裏の15ページになる部分の紙です。「持ち帰り」に関わるスケジュールという部分のところのめくっていただいて、後ろ、ページで言いますと16ページ目あたりになるところで、持ち帰った端末を活用した宿題を出す場合の留意点。その中で、赤字で書いてございますオンラインでの活用でも可能な内容にするなどというところなんですけれどもこちら、オンラインではなく、オフラインの間違いでございます。訂正いたします。よろしく願いいたします。

それでは本市の小中一貫の取組の現状につきまして、臼井指導室長のほうからご報告をさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

指導室長 那珂市教育委員会学校教育課指導室の臼井と申します。どうぞよろしくお願い致します。

特に資料のほうはご用意しておりませんので、こちらの画面のほうに映して説明のほうをさせていただきます。

座って失礼します。

先ほどお話がありました小中一貫教育の現状についてです。

今年度で、本市の小中一貫教育も7年目を迎えました。7年目を迎えるに当たりまして、学校の教員も大分入れ替わっておりますので、先日、こちらの資料を基に、那珂市の小中一貫教育が、どのように変わってきたのか、何を大切にしてきたのか、これからどのようなところに向かっていくのかというところを、市内の全ての学校と共有するために用いた資料になります。こちらを通してお話しさせていただきます。

大きな柱としては三つです。

まず、なぜ小中一貫教育なのか。そのあと、大切にしてきたこと。それからこの後のことについてお話しさせていただきます。

まず、なぜ小中一貫教育かっていうところのスタートのところですけど、まず、出発点は、児童生徒の教育上の課題、それから当時の教育の動向っていうところを見据えて、小中一貫教育というものを取り入れてまいりました。

こちらが、1番最初に市内の小中学校それから保護者に配ったリーフレットになります。こちらに取り出してありますように、学力の向上、それから家庭学習の定着、また中1ギャップ不登校、こういったものが主な教育上の課題として当時ありました。

実際どうだったかと言いますと、こちらは、学習面での数値になります。これは平成27年度と平成28年度の県の学力診断のためのテストというものがございます。

左側のところを見ていただきまして、平成27年度、小学校3年生、県の平均正答率との差でここはゼロとしました。

ゼロとしたときに、平成28年度はマイナス0.5ポイント。

小学校4年生、小学校5年生の変化を見ますと、平成27年度をゼロとしたときに、小学校5年生は若干上がってました。小学校5年生、6年生の変化、こちらも上がってました。

小学校6年生、中学校1年生、ここもマイナス。中学校1年生、中学校2年生には、マイナス1.1です。

数値的には小さいですけども、これが全生徒の平均ですので、トータルするとある程度の数値となります。

こうして見ますと、小学校3年生から4年生、小学校6年生から中学校1年生、中学校1年生から2年生、ここの学年段階のところ、教育の課題があるっていうところが見て取れます。

またこちらの資料は、毎年不登校援助指導報告といいまして、欠席が10日以上になったときに報告をいただいているものです。この、当時平成28年度は、全部で56件上がってまいりました。このお子さんたちが、10日以上欠席の報告があったのが、いつだったのかということ振り返ってみた資料です。

そうすると、小学校3年生の3学期、このあたりにまず欠席が増えている傾向がある。また小学校4年生。それから、1番多く目立っているのは、中学校1年生2年生、このあたりに、欠席が増えている傾向が見られるということです。

この二つを重ね合わせますと、ほぼ重なる部分が見られます。学力のほうで難しさを感じている、それによって欠席が増えているのか、また欠席が増えているから、学力のほうが少し低下しているのかってというような、どちらかの相関関係が見られるっていうのがまず一つ実態としてありました。

これが小中一貫教育を進めるに当たっての大きな理由の一つです。

また、この当時は、新しい学習指導要領に向けていろいろと動き出した時期です。左側の平成26年度、平成27年度、こちらの国のほうでは、中央教育審議会、それから論点整理ということで、新しい学習指導要領の方向性が示されました。こちらで示されたのが、今までの知識機能とか、考え方とかそういったものではなくて、生きて働く知識技能、また、未知の状況、そこに対応できる思考判断表現、それから習ったことを社会で役立てようとかってということで、学びに向かう力、人間性の^{かんよう}涵養という、この3つの資質能力という新しい言葉が国から提示されました。

ちょっとこちら飛ばします。

これが、大きく示された資質能力の3つの柱となります。これだけを見るとなかなかわかりにくいので、一つ問題で紹介したいと思います。こういったものが国から示された後、こういった問題が表れてきました。こちら、新聞にも大きく取上げられた問題ですが、茨城県の高校入試の数学の問題になります。

従来ですと、この上のほうにあるような計算問題が出ておりました。中学校の教員をしていたこともありますので、その当時は、とにかく1番の(1)、(2)、(3)、ここでしっかりと間違えずに点数取るんだよというような指導が多くの学校でなされたんではないかなと思います。

それが一変しまして、1番の(1)からこのような問題が出題されました。

実際は、この問題を読んでこの「 $-3 - (+2) =$ 」、この計算をして -5 ということを経験すればいいだけなんですけど、このように文章から式を生み出さなければいけない、こういった力が問われるようになってきました。

まさにこの生きて働く知識っていうものが求められてきたっていうのが、国が求めている、学力っていうところが変化してきたものになります。

また、これは令和元年度の全国学力学習状況調査の小学校6年生が説いた問題になります。

このような問題です。1番最後の問題でした。

はるとさんたちという男の子のグループが、限定商品を買うためにレジに並んでおります。レジに並ぶるときにたくさん人がいます。レジまで14ポール分の長さがありまして、3時までにレジについて買物をしたいというふうに考えていました。そうすると、

この子たちは3時までには買物ができるかどうかというのを悩んでいます。

次の場面になります。

時間が経過すると、4ポール進むのに8分かかってるってことはわかりました。じゃあ、レジに間に合うかなってことでこの子たちは算数を使って計算するわけです。

ここで、未知の状況にも対応できる思考判断表現っていう、こういうふうには算数を使って考えて判断していきましょうというものが、国から提示されたものです。

1分当たり、4ポールで8分ですから、1ポール当たり2分かかってるってことはわかります。そうすると、間に合いそうだなというふうに判断するんです。すると、また状況が変わります。レジの店員が2人から1人に減ったことで、進み具合が遅く感じるんです。

そうすると3ポール進むのに、9分かかってるんです。じゃあ、1ポール3分だなということで、レジまで間に合うかなってことで、問われたのがこちらになります。最終的に、この子たちは、時間に間に合ってる着くことができるのかできないのか。また、できないならその理由を、できるのであればその理由をとというのが問題となっています。

このように、今までは計算して答えが出ればという問題だったんですが、こういう場面、生活の中で算数を使って、そこで思考判断表現、また学習したことを生活に使いましょうというような、そういう学びに向かう力、人間性の涵養ということが求められてきた時期でもあります。

このようなことから、先生たちへの求め、学校教育に対する期待も大きいですが、それだけ私たちも悩むことも多かったです。

例えば、先生たちは、新しい学習指導要領の目指すところは分かるけれど、またプログラミング教育っていうのも出てまいりました。道徳も教科化されました。三つの資質能力という新しい言葉、外国語活動も、小学校5、6年生は教科となりました。

やるべきことが盛りだくさんってというのが、その当時の、今もそうなんですけど、現状です。

ですが、小中一貫ということで、この市内を見回しますと、たくさんのプロフェッショナルな先生たちがいるんです。その先生たちの力をうまく活用して、一つの学校だけとか、学級だけにとどまることなく、市内全体で活用していきましょう。また、1年間だけの取組では、あのような力はつきません。それを小学校でも中学校でも連続して育てていきましょう。そうすることで、子供たちに確かな力をつけていきましょうということで、先生方一人一人の強みを有機的に機能させていきましょうということで始まったのが、那珂市の小中一貫教育となります。

そこで、平成27年度から、那珂市のほうではどのようなことに取り組んできたのかということについて、2つ目の柱のほうに進めさせていただきます。

まず、この1年ぼっきりにしないということで、那珂市のほうでは、各学園ごとに、

グランドデザインというものをつくりました。9年間でこういった児童生徒を育てていきますっていう長い目で見た連続的な学びにしていきたいと思いますというのがこちらになります。

一つの成果としましては、学園内での先生方が交流する場面が増えますので、それによって話し合いがなされて、このような児童生徒を育てていこうということを共有できたっていうのは大きいことかなと思います。

ですので、ここから見えてくるものとして、大切にしてきた1つ目としましては、学園内での共通の教育目標を立てて、目指す児童生徒像を設定して共有しましたっていうのが大切にしてきた一つとなります。また、子供たちの学びを連続的に系統的にっていうことで、9年間の学び、それから全ての担任の先生たちが横のつながりを持って、子供たちの学びを支えていこうという、このような図の下、大切にしてきたことの1つがこちらになります。

学習の手引というものを作成しました。こちらは、前期、中期、後期の3分冊にしまして、全ての教科がこちらのほうに掲載されております。こちらを見ますと、学習のポイントというものがありますので、どういうふうに考えていけばいいのか、これを発達段階ごとに、前期、中期、後期と、育っていく資質能力に対して作成してありますので、こういったものを大切にしていまいりました。

そうしますと、大切にしてきた2つ目としましては、9年間で連続的、系統的に、一貫して進めていきたいと思いますっていう、2つ目のポイントとなります。このポイントは、学力面だけではなくて、児童生徒の豊かな心を育むということでも現われております。

那珂市の名誉市民4名の資料を含む、全18件の読み物資料をつくりまして、これは市のオリジナルの道徳の教科書になります。こちらの目次を見ますと、「四匹の狐」こちらは小学校1年生2年生対象の教材となっております。

これの、真ん中下のほうにいきますが、「志を果たす」という、根本正の事例になりますが、こちらは中学校3年生対象の資料となります。

このように、道徳のほうでも、小学校1年生から中学校3年生まで、連続的に育んでいきたいと思いますという資料を作成しました。ここからもポイントとしては、9年間の連続的、系統的な一貫教育というものを大切にしてきたということが分かるかと思います。

また、各学園で様々な工夫された取組をしてきました。学園ごとに、小小連携、小中連携、今年度は先日緑桜学園でお茶摘み大会、こちらのほうを中学生と、それから6年生で行ったというふうに報告を受けております。このように、小小連携、小中連携、また地域の協力を得た連携、それから保育園幼稚園も交えた連携ということを行ってきました。

ここから大切にしてきたことの3つ目として、学園の子は学園で育てるという意識を共有して、教職員、保護者、地域による共同実践というものがあげられます。

このように那珂市の小中一貫教育では、これまで、この1、2、3本柱を大切に推進してきたところです。

しかし、昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、こういったものできないこと、やっではいけないことっていうことで、大分制限されました。そこで、新たな小中一貫教育っていうことで、先進めていこうっていうことで、現段階考えている、構想していることについてお伝えいたします。

今年度は、那珂市小中一貫教育のグランドデザインとしまして、このオレンジ色の部分をご覧くださいと思います。本年度の推進テーマは、時代のニーズに対応した新たな小中一貫教育の推進としました。こちらは、感染症対策を講じながらの小中一貫教育になります。また、1人1台タブレット、こちら導入されます。また、グローバル人材の育成ということで、県のほうも重点として取り組んでおります。さらには、SDGsへの取組など、時代が求めるものが多種多様になってきています。

そういったところから、時代のニーズに対応した新たな小中一貫教育ということで、推進してまいりたいと考えてます。ただ、ここでも9年間の連続的、系統的な教育を実践する、また保幼を含めると、11年間という視点で考えていきたいと思っております。

具体的には、学力向上の推進としましては、まず一つは、英語教育のほうに力を入れていきたいと考えております。英語教育のほうでは、「CAN-DOリスト」というもの、ここにありますが、何ができるようになるかという視点でつくったリストになります。これを、幼稚園、小学校、中学校の11年間を見通した、「CAN-DOリスト」というものをつくって、それを授業で活用することによって、子供たちの英語力を身につけさせていきたいというふうに考えております。

2つ目としましては、1人1台タブレット、大きくはこちらになります。昨年度末に、「E那珂スタイル」というものを作成しました。こちら学校のほうに配布してあります。これは日常的に、例えば朝の会とか帰りの会ではこんな活用が出来ますよっていうものをつくった冊子になります。こちらを令和3年度は1人1台タブレットを見据えて、授業場面での活用事例というものを作成したいと思っております。これも、授業場面で活用することによって学習の基盤となる、これは文科省が強く言っておりますが、情報活用能力を育成していくっていう視点でも考えている冊子となります。こちらの事例を集めまして、今年度作成する予定です。

また視点3としまして、保幼小中連携事業を推進してまいります。こちらにありますのは各種研修とか取組の内容になります。

特に保幼小中の合同研修会というものを、今年度は実施しまして、11年間っていうスパンを見据えて取り組んでいきたいと思っております。またこの中では、小学校の先生の保育体験、また保育の様子を参観するっていうように、相手を知るといような、そういった研修のほうを計画しております。また、保幼小中連携の推進ではあるんですが、教育

支援委員会、特別支援教育のほうにも力を入れていく次第です。

前後しますが、学力向上のほうに一つ戻ります。今年度の最大の重点としましては、那珂市の小中一貫教育の中期に当たるところで、市独自のカリキュラムをつくっていきこうというふうに考えております。こちらは、小学校5年生、6年生、中学校1年生の国語、社会、それから算数、数学、理科、英語の5教科について、独自のカリキュラム、それから独自のテキスト教材をつくりまして、学力向上のほうを進めていきたいというふうに考えております。このように様々な取組があるんですけども、このような取組を市全体で推進していくことで、チーム那珂市として、子供たちの育成に求められる力を身につけた子供たちを育成していきたいというふうに考えております。

私から以上になります。

委員長 ありがとうございます。

それでは、これから意見交換に入りたいと思います。

ただいまの報告の内容や、学校教育全般にわたっての内容について、委員の皆様から質疑ご意見ありましたら。挙手にて、発言していただきたいと思います。

それではよろしく願いいたします。

古川委員 ご説明ありがとうございました。

今ご説明いただいた中で幾つか質問させていただきます。まず、小中一貫教育の目的だったり、理念だったり、これは導入当初、私も賛成しましたし、間違っていないんじゃないかと思うんですけども、ただその目的の中に例えば学力の向上だったり中1ギャップの解消とか、不登校の解消とか、そういったものが導入して7年経ってどうなったのか、増えているのか減っているのか、学力は上がっているのか。先ほどの資料の1番最初に、学力が落ちたという説明ですかあれば。もう一度見せてもらっていいですか。ちょっとわかりづらいんですけども。その表で、マイナスになってるってことは落ちてるってことなんですか。四角で囲んだ部分とか、マイナス0.5とか0.1とか。

指導室長 こちらの四角で囲ってある緑、赤、青の部分、こちらについては、学力が低下してるっていいですか、平均正答率は低くなっているということを示したものです。

古川委員 そうですよ。

ですから、せっかく小中一貫にしたのに、小学校6年生から中学校1年生、中学校1年生から2年生と落ちてるってことは、何か逆効果になっちゃったのかな。その辺を、学力だけじゃなくて先ほど言ったように、中1ギャップだとか不登校の解消とか、そういったところが改善されてるのか、その小中一貫を導入したことによって。そこをしっかりと検証しなければ、導入した目的から外れて、逆効果だったのかなというふうになっちゃうんですけどその辺はいかがなんでしょう。

指導室長 こちらは、小中一貫教育を始めるに当たってのデータになります。

その当時は、このような結果で、平成27年、平成28年、スタートの時期、そのときの

結果ですが、そこで見ますと、このように、小学校3年生から4年生、小学校6年生から中学校1年生、中学校1年生から2年生というところで、平均正答率がややマイナスになっていたという現状が見られました。そこで、小中一貫教育を推進していく必要性があるのではないかという、その指導となります。

古川委員 その後どうなったって話ですが。

指導室長 こちらグラフにしたものはないんですが、全国調査が分かりやすいかなと思いますので、調べてまいりました。

平成27年度、小学校6年生だったお子さんたちが、まず全国と比べますと、平均正答率がプラス0.72ポイントでした。この子たちが、小中一貫教育を受けまして、中学校3年生に成長したときの、全国学力学習状況調査の平均正答率がプラス1.92ポイントです。ですので、0.2ポイントではあるんですが、プラスというふうになっております。

また、平成28年度に小学校6年生だったお子さんたちの平均正答率が全国と比較すると0.95ポイントプラスでした。これが令和元年度、中学校3年生になっております。そのときの全国と比較したときには、プラス4.2ポイントですので、3ポイント以上プラスというふうに効果があらわれております。

ちなみに令和2年度については、全国調査、新型コロナウイルスの関係で実施できませんでしたので、この2つの事例でしか紹介できないんですが、学力面については、数値的に効果が見られているというのが検証されております。

さらに不登校児童生徒については、こちらに現在どのような変化があるのか、全体図は捉えているんですが、学年ごとの変化というものを今調べてるところなんです、エビデンスは図られていないんですが、若干これは時代のさま変わり、背景もあるんでしょうか。大きく数値的には、効果としては見られていないっていうところがあります。

古川委員 そういったところをきちんと検証していただきたいということと、今のおっしゃった学力が上がったというデータだけじゃありませんか。それと、上がっても上がってなくてもこういうことをしてるって具体的なことをちょっと教えていただきたいです。学力がなぜ上がったのか。ただ、結果的に上がったからいいだろうじゃなくてどういうことをしたから上がったんだっていうところが見えないんですね。

指導室長。はい。幾つか要因はありますが、まず一つは、これまで学力を上げるためには、単年度だけの取組では、上がらないというふうに考えております。これを継続的に、何年もかけて取り組んでいく。

そうしますと、小学校での取組と中学校の取組が大きく変わってしまうと、せっかく培ってきたものが台無しになってしまうということもあります。ですので、この小中一貫教育で大事にしている点の一つとして、この小中学校の共通目標を設定しましょう。

これは学園ごとですから、2つの小学校がある学園もあります。この2つの小学校とも、共通目標は統一しましょう。また、そこで培ってきたお子さんたちを引き取る側の

中学校のほうも、さらにこういう子たちを育てていきたいと思いますというように、9年間の共通目標と目指す児童生徒像を設定して、みんなでそこに向かって取り組んでいるというのが大きな要因の一つだというふうに考えております。

あとは、こちらのグランドデザインに沿って、毎年、指定校の研究発表会というものを行っております。今年度はわかすぎ学園が担当の学園になるんですけども、それぞれの学園で学力向上、豊かな心の育成等について学園を挙げて研究しているっていうのも、大きな取組、結果、成果とつながった取組ではないかなと思います。

あとは先ほどお伝えしました、このような学習の手引、これを毎年小学校1年生、それから、小学校5年生、中学校2年生に新しいものを配布しております。1年生には、前期のものを、それから、小学校5年生には中期の学習の手引を中学校2年生には後期の学習の手引を配布しております。算数数学一つだけを追っていても、発達段階に応じた学習のポイントというものを示しておりますので、学校での学習、それからこちらの表示してある下には家庭学習のポイントって書いてありますので、家庭学習でも活用できるように、こういったもので、学びを支えているっていうところも大きな成果の一つかなと思います。

以上です。

古川委員 1番最後にご説明いただいたこの資料が具体的に何をしてくるかっていうことなんだと思うんですね。

最初におっしゃった、9年間で目標を立ててっていうのは、それはいいんですけども、それはどういうことをやってることじゃないですか。9年間の目標を立ててやってますっていうだけであって、じゃ9年間にどういうことをやったのかっていうことを聞きたかった。それが1番最後の段階に応じた手引きの学習指導してきたということなんですか。

もっとあるんですか。この手引を配布とおっしゃいましたよね。この配布しただけで学力が本当に上がったのか。もっと具体的にこういうことをしたから上がったんだって言えるようなものはあるんですか。それとも、今おっしゃった手引を配布したから、上がったんですか。その辺どうなんでしょうか。

指導室長 もちろん、手引を配布しただけでは上がりません。手引には、一つの学び方の方向性を示しております。これを各学校、学園がどのように活用していくかっていうのが、学力向上には大きなところがあると思います。ですので、どのように活用するのか。それから、それによって、どのような力がつくのかっていうところは、ここでちょっとお示ししてはおりませんが、年度当初に、活用の仕方っていうものを各学校に配布したりということで啓発をしております。

それと、やはり1番大きいのは、市として何をしてくるかっていうところからはちょっと外れてしまうんですが、各学園で研究授業をしているっていうところは大きなこういった

学力を上げる大きな取組かなと思います。

学園一丸となって、こういう子たちを育てていきたいという取組で研究事業をして、市内に公開授業をしております。市としては、その公開授業をするに当たって、私たちは指導助言という形で、その取組の背中を押しているというのが、市の取組になります。

古川委員 分かりました。多分今ご説明いただいたのは教育委員会として何をしてるんだって、私が聞いたとご理解されているんですよ。私は、現場でどういう先生方がどういう指導したんだってという、そこがちょっと聞きたかったんです。それは分からないですか。具体的に。今おっしゃったような教育研究とか、各学園でやってることが、その成果につながったものと思われるっていうことなんですか。

指導室長 先ほどの最初の話にはなってしまうんですけども、1番大きなものとしましては、教員それぞれ研究をしております。

ですが、それぞれの取組がばらばらでは、子供たちに力が根付かないと考えます。ばらばらの取組ではなくてそれぞれが持っているものを共有して一貫して取り組んでいくというのが、子供たちの力を少しずつ積み上げていくものだというふうに考えます。

ですので、やはり1番大きなところは、学園でどういうことが子供たちを育てていくのか。何をして育てていくのかっていうのを、それぞれの学園学校で話し合って、毎年地道にそれに取り組んでいるというのが、学力向上につながっている大きな要因ではないかなというふうに考えてます。

古川委員 はい、分かりました。すいません、もう1点。今年の4月から県が方針を示した、各校に1人教科担任を配置すると。そのとおりってませんよね。その辺はどのように市としてはどのようにお考えですか。

指導室長 それではこちら、スライドのほう見ていただければと思うんですが、人的配置についてですが、市としては、小中一貫教育非常勤講師を各校に1人ずつ配置しております。小学校にです。こちらの小中一貫教育非常勤講師は小学校の教員免許を持っております。単独で授業をすることが可能です。

その下のところにありますのは、県の新聞等で報道されましたものですが、小学校専科ということで、配置されてるものです。今年度の県の大きな取組ではないかなと思います。

市内の小学校6校には1人ずつ加配という形で配置されてます。横堀、額田、菅谷東、五台、芳野、木崎、それぞれの教科が括弧内にあるものです。

それ以外の3校については、拠点校方式ということで、第一中学校の教員なんですけれども、小学校に音楽の授業だけ、菅谷、菅谷西、瓜連の3校のほうに、派遣されて授業を行っているというものです。

このように、市の非常勤講師、それから、専科加配がついたことによって、ある学校

の例ですけれど、教科担任制というものが大分進んできているところです。

こちら見ていただきまして、小学校1、2、3年生はほぼ担任が授業しております。小学校4年生のこの担任のオという先生が、この教科を持っているというふうに見ていただければと思います。小学校6年生のサという、担任の先生が、国語、社会、家庭、それから総合、道徳、特活をお持ちになっているというふうに見ていただければと思います。

このように、小中一貫非常勤講師と、それから、ここに算数専科とありますが、算数専科の先生が、算数を持ったり、小中一貫非常勤講師が図工をこのように持つことによって、大分教科担任制が進められているということです。

この学校の大きな特色としましては、例えばこのサの先生は、中学校の社会の免許をお持ちです。ですから、中学校の社会の専科の授業ができています。それから算数については、シの先生は中学校の数学の免許を持っていますので、ここのシの先生の授業に関しては、中学校の免許持ちの先生が、カのところについては音楽の免許をお持ちの先生が、コのところは英語の免許持ちの先生が、より専門的な授業が実施できているということです。

これによって、学力向上のほうも進んでいくのではないかなと思うんですが、もう一つ、働き方改革っていうところでも、週の時数というところにも、好影響が出ているというふうに報告を受けております。

以上です。

古川委員 ちょっと戻してもらっていいですか。人的配置の小中一貫非常勤講師、これは市の独自のですね。その下の県の加配という部分が、県が方針として示した1校に1人ずつ増やすということが方針として述べられているけれども、小学校の6校しかないんですか。

指導室長 9校あります。

古川委員 ですね。

それでも6校にしかつけられてないんですね。その辺をどういうふうにお考えですかというにお聞きしたかったんですけど。県は言うだけ言って、主張すれば、ちゃんとやってよって言いたいところなんだろうけど、その辺がもっときちんと加配が進めばもっといい方向に行くであろうというふうに考えているということで間違いないですよ。

あとは、これの原因は先生がいないんじゃないですか。つけたくても配置したくても。例えば非常勤の、定年なり何なりでお辞めになった先生を当てにしたのか、でも現場の先生方、退職した先生方に聞くと、もうやらないっていう方が多いんですね。そういう方を当てにしたのかなっていうより、それが結局そう思うようにいなくて、結局は配置できないっていうことなんだろうかな。

予算はされてるわけでもんね。人がいないってことしか考えられないんですけど、そういうことなんですか。

指導室長 こちら市としては、県のほうには、各学校、小学校専科としてこの教科の先生をつけてほしいということで要望しております。県のほうから今年度、那珂市のほうにおりてきたのが、小学校専科の各学校に1人配置っていうところは、6校までですよ。それから、残りの3校については、拠点校方式で人をつけますよというふうに、県のほうから下りてまいりまして、その下りてきた配置計画に則って、市のほうでは、先生方を探して配置をしたということになります。拠点校を含めると9校に何らかの形では専科教員が配置されているということです。

古川委員 人がいないということではないということですね。

分かりました。ありがとうございます。

委員長 ほかにご意見は。

寺門委員 小中一貫のお話をいただいたんですけども、大まかなところは、お聞きしたんですけども、これは実際に全部の小中学校回られたというお話でしたけれども、当初やろうとした項目については、それぞれ、評価をして課題とするところと、いわゆるできたところ、できないところがたくさんあると思うんですけども、その点については先ほど3点ぐらいまとめられて、できたところについては聞きました。

できないところについては、当然これからやらないのか。そして、今後も継続してやっていくのかっていう点がちょっと不明確だったかなという気がいたします。

新たにまた、この小中一貫を始めるわけではないので、やはり今まで狙いとしたことができていいのか、できてないかっていうのは、きちんとやっぱり保護者も含めてお知らせをしていただきたいと思うんですね。特に小中一貫については、正直言ってあんまり理解しておりません。保護者の方。何それって、ただの名称を学園名称だけつけて、あと何やってんのというところなんで、現実の姿は。今、お話しいただいたことについては、我々は理解できるにしても、保護者については、本当にそうなのっていうところが分かってないので、非常に学校と保護者と地域と、当然行政も含めて一体化して進めていかないと、当然その目標に対してはきちんとできていかないっていうところがちょっと心配なんで、やっぱりそれぞれにも知っていただくというのは非常に重要なことだと思うんです。今日はできたことだけ聞きましたけれども、それはそれでいいと思うんですが、その辺は十分、評価をしてこうだったんだけど今年度からこうしますよということを言っていただきたいなというふうに思います。

それと学力については、先ほどは平均の話なので、多分できる子とできない子って、相当格差がついてるんじゃないかなと。平均をとれば当然できるということになって、プラス、中学生でいうと0.2ポイントがよくなってますという話ですけども、現実各実態見てみるとね、極端になってるのか中間がいるのかいないのか。その辺もきちんと

見ていただきたいなというふうに思います。

最終的には学力も当然必要になるんですけども、小中一貫で狙っているのはどんなところへ行っても、たくましく生きていく力をつけるんだよということなんで、そういう力をちゃんと身につけられるように、サポートをしていただきたいということからすると、平均いってるからいいやということではないと思います。私はよくなってるっていう話は聞くんですが、前の統一の学力検査なんかも見ましたけれども、もう本当にそうなのかなとはちょっと疑問っていうか、そうなのっていうところでちょっと納得できないんですね。

もう1つの点は、県立の中高一貫ができて、さらに受験戦争に輪がかかっちゃってるのが今の現状だと思うんです。小学校も5年生から塾へ行って県立中学受験しようとする。あるいは私立中学受験しようということで、結構そういう方も増えてくるので、これは当然、個人の自由もありますし、保護者の将来の進路については自由があると思うんですが、小学校から中学校へ進むときに県立の中学に行く。そうすると公立には来なくなってしまうんじゃないか。当然その学級、人員の問題もあるでしょうし、公立は公立でちゃんとした、教育目的があるわけですから、そのエリートだけ集めて養育しようということではないんで。みんなそれぞれこの町に住んでる子たちをきちんとたくましくしましょうということなんで、それからするとちょっと途中で抜かれちゃってこの地元の中学生の子供が少なくなっちゃって非常にこの小中一貫に対する教育も、もう少し学力を重視するだとか、那珂市らしさをもっともって出していく必要があるんじゃないかという気がするんですけども、その辺についていかがですか。

指導室長 まず、最初にご指摘をいただきました、あまり知られてないのではないかということについて、まずお話しさせていただきます。こちら教育委員会としても、課題として捉えております。今年度あらゆる場面での説明で、小中一貫教育を柱とした説明のほうさせていただきまして、市内の小中学校の、まず教職員一人一人が、那珂市の小中一貫教育って何なのかっていうところを理解してもらえるように、今進めているところがあります。

また地域、保護者に対しても、広く知ってもらう必要があります。こちらについては、ある学園ですけども、保護者会で、小中一貫教育について説明してほしいということで、依頼を受けております。

このように先生方に知ってもらおうという取組をすることによって、その学校から、地域にも説明してほしいというようなお話が出てまいりましたので、こういったことを継続しながら、那珂市の小中一貫教育というところを広く周知していきたいというふうに考えてます。

また時代でしょうか、ホームページを充実させてそちらで発信させていくということも、今考えているところです。

2つ目のお話です。

中高一貫校っていうところのことも見据えて、那珂市としての小中一貫教育、那珂市の子は那珂市で育てていくっていうところに、どのようにしていくかっていうところだと思うんですが、こちらは先ほどお話をした中で、今年度は、中期のカリキュラム、市独自のカリキュラムを作成しますというお話をしました。こちらの先ほどの古川委員の質問にも関わってくるかと思うんですが、今年度の学力向上の大きな取組になります。

具体的には、またスライドのほう見ていただければと思います。こちらの小学校6年生の算数の数字というふうに捉えていただければと思います。

小学校の6年生は1年間で、175時間で教科書の内容を学習します。これを市独自の年間時数、カリキュラムをつくるっていうことで考えているんですが、この175時間をその中から、今カリキュラムマネジメントって言われてる、上手に軽重をつけて、時間を生み出して、柔軟にやっていきたいと思いますというお話が国からも出ておりますので、そのように柔軟に考えまして、175時間のうち15時間を市独自の時間というふうに設定していきたいというふうに考えてます。これは小学校6年生です。

ですから、小学校5年生でも6年生でも中学校1年生でもこのようなことをしていきます。では、15時間をどのように生み出すんですかということですが、次の下の表になります。これは、小学校6年生の1学期の学習する内容になります。10時間かけて対象な図形というものの学習して、7時間かけて分数と整数の掛け算割り算、6時間かけて円の面積っていうふうに見ていただければと思います。

これが、教科書会社が示している、カリキュラムになるんですけど、これを先ほど申しました10時間を上手に軽重つけながらやることによって、例えば大きな単元であれば、9時間で学習できるように工夫しまして、1時間生み出しましょう。それから図形分野ですと学習内容からすると、上手に習ったことを活用すると、時数を減らすことできるんじゃないでしょうかっていうふうに、このように、カリキュラムマネジメントをすることによって、この朱書きのところのように、上手に時間を生み出しまして、この時間で学習するオリジナルテキストを作成していく。

そうすることによって先ほど話したような、このような問題にも対応できる、そういう、習ったことを活用できる力をつけていく時間というものを設定しようというふうに考えております。

これは今年度の大きな取組となります。

これも算数、数学だけではなくて、主要5教科、こちらを教育研究会と連携をとりまして、作成してこういう時間を生み出していく。これを中期の大きな取組としていきたいと考えてます。

また来年度以降ですけれども、これを後期、それから前期というふうに幅を広げていきまして、那珂市独自のカリキュラム、那珂市独自のテキストっていうものをつくって

いき、それを活用しながら子供たちの生きて働く知識機能とかっていうような資質能力を育てていきたいというふうに考えてます。

以上です。

寺門委員 分かりました。独自のカリキュラムで、特にその考えることについて、力をつけてるって非常にいいことだと思いますんで、当然これからは考える力が必要になりますし、そういう教育方針出ているんで、ぜひお願いしたいと思います。

そういう意味で、その考えということであれば、今の英語の授業についても、この間小学校6年生かな、私もちょっと見る機会がありまして、参加のほうをしてきたんですが、自分の意見をきちんと持つて言うということと、違うっていうのを認めるということ。積極的に発言するということを英語の授業ではやっていました。楽しく授業ができてたんで、やはり我々っていうかその昔と大分変わったなというのは実感をしたところなんです。

ですから英語についてももう少し、考える時間もそうですし、自分の意見をきちんと言うということも含めて、進めていただけるとありがたいなというふうに思います。

ディベートの時間も、それは高学年になってからの条件だと思いますけれどもそういう時間も増やしていただけたらというふうに思います。

もう1点、特別支援学級なんですけれども、その児童数が増えているという話を各小学校で聞いています。児童数全体は減ってるんですけれども、ちょっと障がいをお持ちの方が増えているということなんで、そちらに対する先生方の配置だったり、体制だったりっていうのはどういうふうになってますか。

指導室長 まず、児童数が増えている。確かに毎年、教育支援委員会のほうにかかる、審議をするお子さんっていうのが、年々増加している傾向があります。

こちら増加に伴いまして、支援学級っていうのは8人が上限になるんですけれども、9人になったときに、学級が1クラス増になります。

ですので、来年度を見据えてどのくらい増になるのか。それによって教員の配置定数が変わりますので、そちらの定数、分かった時点で増やすように県のほうに要望しながら取り組んでいるところです。

なおご指摘のとおり、配置計画、それから財政面というものがありますので、今年度は、ちょっとスケジュールのほうは持ってきてないんですけれども、今まで教育支援委員会が3回だったんですけれども、こちらをここの1番下の段の左側に教育支援委員会年4回というふうに書いてありますが、年1回増やしました。今年度は3回を4回として実施しまして、第2回目を9月に実施します。

9月に実施することによって、予算編成、それから教員が増えるのか減るのかっていうところでできるだけ早く対応できるようにというふうに、このように考えております。

寺門委員 先生方はお忙しい毎日を過ごされてると思うんですけども、働き方改革の一環

でいろんな支援する方が学校内に入って、配属されているかと思うんですけども、先生方帰るのが早くなりました。実際に実感として。その辺はちょっと非常に気になっておりまして。早く帰れているんだらうかと。会社でいうともう定時退社というのもあり得ないですけども、この市役所でも、夜遅くまで明かりがついていて、1週間に1回だけ、ノー残業デーは設けてますけれども、その辺の労働実態っていうのはどういうふう把握されてますか。印象で結構ですけども。

指導室長 超過勤務時間については、国、県からは1人当り月45時間ということが謳われております。

こちらについては、月に1回、教育委員会のほうに各学校から何時間超過勤務、平均何時間なのか、それからトータルで何時間なのか。45時間以内は何人なのかとか、そういう報告をいただいているところです。実感としましては、比較をどこにするかなんですけど、私が担任しているときと比較すると、大分意識改革が進んでいるかなというふうに考えております。

また中学校の部活動も部活動の数の適正化に近づきつつありますので、これは長期的な計画で部活の適正化に向けて進めながら部活動についても、あまり負担にならないように、子供たちにとって充実した活動になるように進めていく必要があると思います。

あと時期によります。ちょうど報告を開始した時期が最近ですので、3月それから4月については、やはり超過勤務は増えるっていう時期ではあります。

ですので、5月、6月、7月、この辺りを見ていく必要があるのではないかなと考えてます。

以上です。

教育部長 補足です。教職員の働き方改革については、これから少し期待できる要素としては、校務支援システムを今年度から導入します。

これによって子供たちの学籍処理、成績処理等々がシステム化されることで、業務の負担軽減にはなるのかなと思ってます。教職員の先生で勤務時間は、小学校はさほどではないと思います。特に中学校ですよ。多分、ご承知のことだと思いますけど、部活動があることで、どうしても教材研究が後ろ倒しになってしまうという事情はあると思います。

ただ、昨年、一昨年でしたか、部活動の運営方針を定めました。

平日は2時間程度の練習、休日も3時間程度の練習ということで、子供たちの健康管理、プラス先生の負担軽減ということで、2つの目的を持ってやっております。徐々に効果が出てくるかと期待いたしているところです。

以上です。

委員長 ほかがございますか。

關委員 本当に先生方、大変だと思います。いろんな問題が、これから山積みですので。

educationってeducaitoていうのはラテン語で、能力を引き出すっていう意味があるらしいんですけども。今そういった観点から、ペスタロッチはよく、「一人を失うとき、教育はその光を失う」って有名な言葉もありますが、iPadを導入したことによって、子供の能力の違いに応じた個々の能力の引き出し方っていうのが、よりスムーズにできるようになるのかどうかっていうのが一つ期待をしているところなんですけれども、その辺のところはどうなんですか。

指導室長 お配りしてあります、資料の5ページの下に5というふうにナンバーがふられてるページがあるかと思います。

こちらは茨城県教育委員会が出しております、新しい時代における子供たちの学びのスタイルというものになります。ここで中段にありますように、これからの学びのスタイルというものは個別最適化された学びっていうのと、協働的、探求的な学びっていうものがあります。

今、ご質問いただいた内容はこの個別最適化された学びというところにも関係してくることかなというふうに思います。こちらはiPad導入、1人1台タブレット端末になったことで、それぞれの学びが、画一化されたものではなく、個別化されたもの変わってくるというふうに期待しております。

ですので、ここは私たちの教育委員会からの働きかけにもなると思うんですが、先生方にとっては新たな試みになりますので、どのようにこのルールを決めていくのか、またどのように活用していくのかというものを、先ほどお伝えしました、「E那珂スタイル」ですとか、またこれの学習版、授業版などを配布しながら、啓発していく必要があるかなというふうに考えております。

先ほどお話ししましたルールですけれども、先生方が初の試みなので、あれもこれもとルールをつくってしまうことによって、子供たちの学びが制限されてしまうというのがありますので、どの程度のルールで、どの程度自由度を与えるのかっていうところを模索していく必要があるというふうに考えています。

また、先生方にとっては壊したら大変だとかっていうところも心配されてると思いますので、iPad一台一台に補償がついておりますので、もう壊れても大丈夫だから、使ってくださいっていうことで、どんどん進めていくことによって、活用の幅が広がり、個別最適化された学びっていうところにつながっていくんじゃないかなと思います。

なお、市としては、各家庭に持ち帰っても、それぞれの学習ができるようにということで、こちらの資料のほうでは、14ページのところに、デジタルコンテンツの活用とか、インターネット環境の整備、家庭学習のオンライン化っていうふうにありますように、持ち帰っても学習できるような支援のほうはしております。

以上です。

關委員 ありがとうございます。当然、先生方の指導のスキルも問われてくるんだろうという

ふうにと思いますが、私たまたま今、九州の徳永康起先生の本を読んでるんですけども、明治の終わりの頃の先生ですけども。その先生はああいう時代に、生徒一人一人、校長先生から平教員に戻って大変有名な、ご存じでしょうけど、先生なんですけれども、個人個人の連絡帳をすごく大事にして、子供一人一人の能力を引き出すような、連絡の交換ですか、日記帳の交換をやってるんですけど、そういう意味合いからも、このiPadはそういう個人に向けた、新しい指導方法になってくるのかなっていうふうに、大変期待してるんですけども。今現在は、生徒への連絡帳というのは、小学校はやってるんですか。中学校はないのかな。その辺のとこどうなんです現状。

指導室長 小学校は連絡帳という形で、毎日担任の先生とノートを通してやりとりをしております。中学校については、一般的には生活ノートっていうような呼び名がされますけれども、一つの冊子になっておりまして、子供たちが、毎日日記のように数行書いて、今日はこんなことやりました、こんなことを感じましたっていうのを書いてそれを担任の先生に提出して、担任の先生との交換日記じゃないですけども、そういうやりとりをしております。

学校によっては、スケジュール帳のような形で、自らスケジュールが組めるような、資質能力が必要だろうというような取組をしている学校もあります。

關委員 ありがとうございます。最後に1点。よく新聞をにぎわせている、中学校の部活の外部講師、それは今、那珂市なんかの現状はどのぐらい外部講師を雇っている学校もあるんでしょうか。

学校教育課長 はい、現状中学校2校が柔道のほうで、外部の方、引率とかそういうできるような形で来てもらってるという形ではないんですけども、競技の実技のほうの指導というような面で、ここ数年お二人来ていただいております。

以上です。

副委員長 先ほどのタブレットの件なんですけれども、児童が持ち帰りできるっていうのは、もう小学校1年生から持ち帰り大丈夫なんですか。

指導室長 まず結論からいきますと、小学校1年生から持ち帰れるように推進しております。現在配置は、今週の水曜日をもちまして全校にタブレットを配置ができる予定になっております。こちらから様々な設定を通して、1週間ぐらいかけて一度持ち帰って、こういったものが導入されたんだっていうのを各家庭に周知してもらう予定になってます。

あと夏休みまでに計画的に授業で使いながら、学習のルールを確認しながらっていうふうなことになると思うんですが、夏休みまでには、持ち帰りができるようにということで、市としては推奨しております。

以上です。

副委員長 分かりました。先ほど何か補償入っておられるって言ってたんですけども、タブレットが自宅でもし故障か何か、子供ですから壊してしまうこともあると思います。そ

れを自宅でも、補償の範囲内っていうことなんですか。

指導室長 学習に必要な活動をしているというのが大きなところだと思うんですけど、家庭であっても、学習に必要な活動をしていましたとか、あと故意に壊してしまったとか、そういうことでなければ、速やかに学校のほうに伝えていただければ、補償の対象となります。

副委員長 ありがとうございます。

あとちょっと気になっていますのが、最近新聞でも出てくるんですけども、ICT化によって、視力低下が心配されてるところだと思うんですけども、そちらの休憩等、学校のそういう取組というのは今のところ何か決められているのでしょうか。

学校教育課長 タブレットの使い方について小学校、中学校に統一的なルールというようなものを、基本的なものを決めてまして、その中で30分に1回ぐらいは目を休めましょうとか、そういったものも盛り込んだ形で一応決めてはいるんですけども、そのとおりにいかどうかまた別問題というのものもあるかもしれないですけども、そういったところで表記はしております。

以上です。

武藤委員 この小中一貫に関して自分も7年ぐらい前のときに、当時の教育長からお話があって賛成の方向で、一般質問とかしてたわけでございまして、こうやってこのパンフレットを見て、ようやく一通りいろんなカリキュラムができてきたのかなっていうふうに思う次第であります。

ひとつ、大体このリーフレットをみると、やはり教育がちょっと画一的過ぎるなっていうような懸念があると思います。これは、提案でもあるんですけども、せっかく小中一貫教育になって、この期間が前期、中期、後期とこういうふうに割ることが出来て、中学1年生だったのが7年生になったり、中学2年生だったのが8年生になって、そこから後期っていうふうなことができるんですけども、いろんな学習能力の子がいると思います。

その学習能力は画一的である必要はなくて、確かにたくましく生き抜く教育ってのは基本理念であるんですけども、ここでやはり、将来の進学とかに関しては、僕は進学コースっていうのをつくるっていうのも一つの手かと思います。そうしないっていうと、やっぱり画一的な同じ先生、同じレベル的に学習の飲み込みが早い子とか遅い子とか、それともあまり学習に関心がなくて、文化とか体育とかに関心がある人とかいると思うんですけど、やはりこれから、将来の日本を背負っていったり、県内のリーダーとしてやっていくためには、やっぱり中学校なんかもあるんですよ。私立の中学校はいろんなコースが。自分も私立高校の役員をしてるので、現在もしてるんで分かるんですけども。やっぱり本人の希望する個性に合った教育っていうのを、ここへせっかく那珂市がこの近隣でない独立した小中一貫教育を立ち上げたんだから、那珂市はね、この後期から例えば

進学コース、こういうをつくる。大体1学年3クラスからあると思うんだけど、そういうのをつくってみてはどうかと。

そして、また中間コースっていうのは、いわゆる学習には関心があるんだけど、そのほかにもまだいろいろと、例えば高校でいうと商業高校とか工業高校だったりで学んできたっていう子とか。

もう一つは体育とかがすごく好きで、そちらのほうに特化してやっていきたいと。

いろんな文科省の制限があって、授業数数とかあると思うんだけど、その辺りひとつ特色を持って、これからせつかく7年間で、ここまでの体系づいたものをできたんだから、これから先のビジョンとしては、やっぱり進学コース、僕、自分自身の経験からいってもやっぱりあると思うんです。ほかの委員もやっぱりあるかと思うんだけど、やっぱり進む子はどんどんどんどん進んじゃって、かったるくなっていくんです、今やってる授業が。そうするっていうと伸びても、学校の先生どっちかっていうと中間層を重視して教育していくもんだから、伸びる子はある程度伸び詰まっちゃう。それと、そうでもない、あんまり関心のない子は、いずれにしてもついていけないんです。

ですからこの際、これからの将来10年20年先を目指して那珂市の本当の人材を育成しようとするのには、しかもほかの水戸市とか近隣の中学校受験とかに目を向かせないと。かなり今、那珂市は教育熱心な親が多いと思います。それで、なぜ水戸第一高等学校の中学校とか行く、茨城中学校に行くとかっていうのは、高校受験から先を目指してるんです。ご存じでしょうけど。やっぱりそういう親にとっては不満なんです。

那珂市で例えば本当の進学を目指してそこから先、それなりの学力を持った学校に進みたいというのは必ず存在するわけで、その子たちの満足する家庭が満足するためには十分必要であっていいのかなっていうふうに僕は思うわけで。せつかくここまで画期的に教育、小中一貫やったんだから、これから先のビジョンとしては、そういう方向性も大きな選択かなというふうに思っております。そうすることによって、那珂市からほかの市町村の学校への進学率の抑制にもなると思うし。いろんな面で、満足できる教育ができるのかなっていうふうに思うんですけども、いかがですか、ちょっと見解をお伺いしたいと思います。

教育部長 義務教育の小中学校で進学クラスをつくるというのは、非常に斬新なアイデアだと思います。

どうしても中高一貫、最近の県立学校のほうで動きが出てきて、さっき寺門委員からエリート教育という言葉もありました。

そういうところはちょっと、いいのか悪いのか、それは私のコメントで言うべきことではないんですが、先ほど寺門委員がご指摘のとおりやっぱり親の考え方、子供の考え方あると思います。

その中で、私たちが小・中学校の義務教育で子供たちを育てるっていうときに、やっ

ぱりその平均値というものではないと思うんです。先ほどその小中教育一貫教育の効果を言われたときには、エビデンスとして平均をお示しするしかないんですけども、本当は子供たち一人一人だと思います。できるようになった、分かった、そういう気持ちを一人一人の子供たちが自分のレベルで、相対ではなくて絶対評価で自分ができるようになった、その喜びを与えるのが私はこの小中一貫教育の本当の目的だと思っています。そこにはやっぱり勉強だけじゃない。やっぱり健全な体、それから豊かな心、そちらやっぱり三位一体だと思っています。

以上です。

武藤委員 今、部長のほうから、子供の教育についてのある程度の指針っていうのが十分示されたので、僕も十分理解します。いずれにしましても、今後の教育の在り方っていうのは、コロナ禍においてどういうふうになるか分からないので、様々な方向性を持って、多様性を持って、進んでいていただければありがたいなというに思っております。

今後ともよろしく願います。

古川委員 これから小中一貫教育を地域の方にもご説明ってしていくんですね。

まず最初に、皆様小中一貫教育とはどういうものをイメージされてますかって1回聞いてみてください。多分、施設一体型なんですよ。なので、そういう小中一貫もあるけれども、那珂市がやってるような併設型の連携型、連携型の小中一貫っていうのを今那珂市はやってるんですよっていうところから入っていったほうが、どうしても、先ほど寺門委員がおっしゃったように、なんだ学園の名前つけてるだけじゃないかっていうふうに思っている方がたくさんいらっしゃるんで、そっから入ってみてはいかがかなかなと思います。

それで、この導入のときに前教育長は、最終目標ではないですけども、いずれは例えば、今現状でいうと瓜連小、瓜連中は、小学校1校中学校1校なんで、そういう施設一体型も視野に、今後ですよ、今後考えていくかと思っておりますっていうような答弁をされてるんですけどそういう今お考えはあるんですか、教育委員会には、現時点で。

教育部長 現時点で、施設一体型をつくっていかうという、明確なビジョンは、今のところを出してません。古川委員がご指摘のとおり、併設型、連携型で、私たちは今、小中一貫教育を進めていかうというところで、少しずつ成果も出てきているというところですよ。

ただ今後、少子化が進んで、那珂市として一体何校小学校が必要なんだ、何校中学校が必要なんだという、いわゆる適正配置という問題を考えていく中で、那珂市のどこの地域に、どの学校っていう議論が、やっぱりもう考え始めていかなければ、後手後手に回っていくのではないかと、もうそのリミットの時期だと思っています。なので、これからそれを考えていく中では、いわゆる義務教育学校、施設一体型の配置を除外することはないと思います。可能性として探っていくその要素の一つになっていくと思っています。

以上です。

古川委員 現状で考えていないと。

教育部長 現状では考えてません。

古川委員 はい、分かりました。もう1点。エドテックって、こういう言葉があるんですか。

造語ですか。Education technologyとかそういう感じ。

指導室長 おっしゃるとおりです。

こちらは国のほうが作ってます、エドテックっていうのを数年前から言われておりました、那珂市のほうでもこのエドテックというのと、エドテックのEと那珂を合わせて「E那珂スタイル」というような形で、学校のほうには示しております。

古川委員 分かりました。

あと、部長から先ほど、校務支援ソフトの話がありましたけど、非常に学校でも助かってるといってお話ですが、具体的に今、こういうことができるようになりました。こういうことができるようになりましたっていうのを今言えますか。もし言えなかったら、言えるようにしといてください。近い将来必ず聞きますから。それによってどのぐらい、いわゆる働き方改革につながったのか。そこのところを必ず近い将来聞きますので、言えるようにしといてください。今もし言えるんだったら言っていたいただいても。

教育部長 本日中途半端な知識で申し上げるとご迷惑になると思うので、その導入するものそれから、どのような効果が見込めるのか、どんな効果があったのかっていうのは、証左を出していきたいと思います。かしこまりました。

古川委員 これから、そういう効果が出てくればいいなと思いますけど。

学校の先生方に聞くと、いいなと思うのはこの校務支援ソフトすごい助かるなっていうのは、例えば先生方は人事異動ってあるじゃないですか。これが教育事務所管内なのか茨城県なのか分かりませんが、これ県か何かで統一したんですって。なので、異動になっても、例えばこれ新しいものが、新しいシステムが次の学校行ったら全く違った、違う支援ソフトだったりすると。もう1回一から勉強しなきゃなんないで、またそこに時間かかってしまうというのがあるんですけども、何か今、どうしてもそれが同じものがどこの学校にもあるので、覚えれば覚えるほど、どんどん改善につながっていくという非常に何か先生方喜んでみたいなんですけど、その辺は把握されてますか。

学校教育課長 県として、全く統一されたこれを使っていきましょうっていうのが示されてるわけではないんですけども今、那珂市で導入するシステムも、県内でのシェアが多いものを使っているんで、結果的にそのシステムを使ってる市町村が、実際茨城県の中でも多分、シェアはトップのシステムなんじゃないかと思うので、そういった意味で、どこに異動しても使えるというような結果につながっているということだと思います。

以上です。

寺門委員 去年は修学旅行って多分中止になりましたけれども、私も他自治体の学校関係ではもう早々と中止ですよという表明をされたところが出てきました。本市は態度決定が遅

いで、どう転ぶか分からないのは分かるんですけども、生徒たち児童たちにすれば、早く決定をしていただいたほうがよろしいかと思えます。いろんな、特に小学校6年生だったり中学校3年生の方はやっぱり思い出に残る、修学旅行って一大イベントなんで、できたら行きたいのは山々なんでしょうけれども。一つ提案は、修学旅行に代わる思い出に残るイベントということで、何か去年も幾つ学校でやられた例があるんですけど、生徒たちが自分たちで、そうすれば1番残るのっていうところをみんなで出し合って、それをやっていくというような方法にしてはどうかというふうに思えます。生徒自体が決めるということで。もしくは小学校6年生ですと、そこまでできるかどうか分かりませんが、あとはその親御さんにすれば、やっぱり今行かしてあげたいとは言わんでしょうけれども、やはり変わるものを早めに準備して、一応思い出に残るように、何とかご協力をお願いしたいなというふうに思えます。

委員長 私から1点だけ。先ほど部長、学校再編っていう話がありましたよね。

子供の今の出生する数を見れば、将来的に学校がこの地域に学校が存在できるかどうかというのは大まか分かると思うんですが、今現状で今後、学校運営が困難とされる地域ってもう出てきちゃってるんですか。

教育部長 先ほど、私申し上げました適正配置という言葉をあえて使わせてもらいました。どうしてもこの学校の数の話になってくると、今、委員長がご指摘のとおり、再編、あと統合、閉校、どうしてもイメージが一緒になってしまうんですね。その前に、那珂市のこの規模で、どのぐらいの学校が必要かってまず適正な配置ってどういうものだろうかというところから入っていきます。

その先に、では適正数ということになったときにその方法というのはそのあとに出てくるものなので、今どこをどうしようっていうプランは全くありません。白紙です。

それを今持ってしまったら、その地域の声、保護者の声を全く無視することになります。そういう乱暴なことは絶対したくないということで、考えるに当たってはやはり保護者、PTA、学校、それから地域の方の考えは、やはり尊重すべきだと思ってます。

今はノープランです。小さい学校だからといって、やはり何かメリットが確実にあります。やはりきめ細かな教育、目の届く教育。やはりその学校の特色を出して、その学校を生き返らせるってそこも同時に考えていくべきものだと思ってます。これからの検討です。

以上です。

委員長 今、適正配置のお話があったときに、新聞の投書で、茨城新聞だったかな。投書で年配の方が、那珂市内の方なんですけど、校歌を残してほしいって市の教育委員会に、電子版で残してくれみたいなことを。その学校ってまだ多分ある学校なんですよ。だからもう統廃合なんていうのも話も出てきちゃってるのかなと思ひまして。私らが知らない中でっていうことだったので、ちょっとお聞きしました。

そのような状況ならそれでぜひともお願い申し上げます。

あと、ほかございませんか。

(なし)

なければ以上で終了といたします。

本日はありがとうございました。

暫時休憩いたします。

執行部ご退席お願いいたします。

お疲れさまでした。

ありがとうございます。

休憩 (午後 3 時06分)

再開 (午後 3 時07分)

委員長 再開いたします。

続きまして、調査事項の内容と今後の進め方についてを議題といたします。当委員会の調査事項につきまして、ご意見をいただきたいと思いますが、どうでしょう。

(複数の発言あり)

委員長 前は、GIGAスクールの調査ってということでいただいたんですが、さっきのとおり、まだ今月ようやく、全校配置というようになったような状況の中で、まだ現在お見せできる段階にないということで、7月過ぎの頃に、調査に行けるというようなお話をいただいているんですが、GIGAスクールの調査でよろしいでしょうか。どういう教育をやっているってそのGIGAスクールの授業内容を見てくるとか。

(「始まって1か月、2か月だよね」と呼ぶ声あり)

委員長 そうですが、どのように子供たちが活用しているのかっていうのも、全然見ないのも、あれかなと思いますけど。

ほかありますか。何か。

実際こうやはりコロナ禍の中で行ける場所っていうのは限られておまして、市内の中での移動になりますが、何校か小学校と中学校ぐらいを見てっていうのがいいのかなっていうのは思っておるんですが。

(「学校行って大丈夫なの」と呼ぶ声あり)

委員長 市内の学校なら……

議会事務局長 学校に確認します。

委員長 前はいいということだったんですよね。7月ぐらいであればっていうことで。

事務局次長 はい。

委員長 感染拡大がなければ、この状況が今の状況であればできると思いますんで、7月の頃に、6月議会閉会后、GIGAスクールを調査するということでよろしいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ声あり)

それはそのように決定いたします。

本日の案件は全て終了いたしました。

以上で教育厚生常任委員会を閉会といたします。

お疲れさまでした。

ありがとうございました。

閉会（午後 3 時10分）

令和 3 年 7 月 1 日

那珂市議会 教育厚生常任委員会委員長 富山 豪